

CONTENTS

1. 主催者挨拶	三友 紀男 (NPO法人 健康と温泉フォーラム会長) ……………	1
2. 広域連携首長挨拶	田中 清善 (阿賀野市長) 吉田 秀光 (三朝町長) …………… 白倉 政司 (北杜市長) 門脇 光治 (仙北市長) 石田 耕太郎 (倉吉市長)	2
3. 基調講演-1 「ラジウム・ラドン温泉の健康効果」	山岡 聖典 岡山大学大学院保健学研究科教授	4
4. 基調講演-2 「温泉地の保養空間と地域振興」	下村 彰男 東京大学大学院農学生命科学研究科教授	5
5. パネルディスカッション 「官民協働による温泉地活性化— 温泉を地域資源として観光・交流・介護・福祉事業へ」	……………	6
コーディネーター	合田 純人 (NPO法人 健康と温泉フォーラム常任理事)	
パネラー	知久馬 宏平 (三朝温泉旅館協同組合会計理事) 小山 芳久 (一般社団法人護持の里たまゆら代表理事) 畠山 米一 (玉川温泉常務取締役) 荒木 善紀 (村杉温泉旅館組合長) 木藤 隆親 (倉吉市観光交流課主任)	
6. 総括講演 「風土に活かされる温泉地—五頭温泉郷地域形成試論(要旨)」	森 繁哉 地域哲学研究所代表 民俗学者 舞踊家 ……………	12
7. 資料編	三朝温泉 …………… 増富温泉 …………… 玉川温泉 …………… 五頭温泉郷 …………… 関金温泉 ……………	14



三友 紀男
NPO法人
健康と温泉フォーラム会長

ラジウム・ラドン温泉を利用した
健康日本推進連絡会議委員長
仙台社会保険病院名誉院長温泉
療法専門医

ごあいさつ

今、全国の温泉地では、地域社会の疲弊と、健康に対する社会的関心の高まりの中で、温泉資源の新たな活用に向けた様々な試みが行われています。中でも、全国有数のラジウム・ラドン温泉をもつ秋田県仙北市(玉川温泉)、山梨県北杜市(増富温泉)、鳥取県三朝町(三朝温泉)、鳥取県倉吉市(関金温泉)、そして開催地新潟県阿賀野市(五頭温泉郷)は2008年より、地域共通の温泉資源の活用による地域活性化の取り組みから、相互に補完できる有機的な広域連携のネットワーク化、さらには観光から健康づくり、介護福祉事業への横断的な取り組み等、新たな温泉の可能性を探ってまいりました。本年の健康と温泉フォーラム2013ではその成果を踏まえ、連携自治体の首長による調印式や、官民が一体となって取り組む地域主体の政策形成のありかたを提示することにより、産官学協働による地域活性化の具体的な取り組みのモデルとして、連携温泉地のみならず全国の温泉地の活性化にひとつの方向性を提示し、行政、旅館組合、観光協会、NPO、健康・介護福祉事業者、商工関係、大学など幅広い関係者の皆様と一緒にこれらの貴重な成果と情報を共有したいと念じております。関係各位のご参加を心からお待ち致しております。



田中 清善
新潟県阿賀野市長

歓迎のことば

健康と温泉フォーラム2013が、自然豊かなここ阿賀野市で盛大に開催されますことは、まことに喜ばしい限りであり、また遠路、各地からお越しいただきました皆様を心から歓迎申し上げます。

さて、全国の温泉地では、健康に対する社会的関心の高まりを受けて、これまでの保養、観光としての温泉にとどまらず、温泉を「資源」とする新たな活用法に向けた様々な取り組みが行われています。

このような中、「ラジウム・ラドン温泉の広域連携による地域活性化」をテーマに本フォーラムが開催されますことは、たいへん意義深いことであり、また温泉地の活性化に向けてひとつの方向性を提示できるものと考えています。

これを機会に、ラジウム・ラドン温泉の社会的活用が図られ、健康増進に向けた取組が一層推進されますことを祈念申し上げます。

終わりに、本フォーラムの開催にあたり、多大なご尽力を賜りました関係各位に深く敬意を表しまして歓迎のことばといたします。



吉田 秀光
鳥取県 三朝町長

ラジウム・ラドン温泉広域連携による地域活性化をテーマに「健康と温泉フォーラム2013阿賀野市」が、温泉という資源を活用して地域の活性化に取り組まれている全国の皆様とともに開催できましたことに深く感謝申し上げます。

三朝町は、町土のほとんどを森林が占める緑豊かな自然環境に恵まれた湯と山のまちです。1164年に白い狼の導きで発見されたと言われる三朝温泉は、1916年に高温泉としてラジウム含有量が世界一と発表されてから一躍脚光を浴びました。以来、この特徴的ともいえる泉質の良さから湯治場として栄え、「不老長寿の湯」、「葉湯」とも呼ばれ、人々を癒し続けて参りました。微量な放射線が身体に及ぼす健康効果について世界的に注目される中、ラドンの健康効果を学術的に証明するため、平成21年に世界初となる「三朝ラドン効果研究施設」が、岡山大学病院三朝医療センター内に完成し、ラドンの健康効果について研究が行われています。この成果として、アルコール性肝障害の緩和、I型糖尿病の症状の緩和等が示唆されており、三朝温泉の健康効果が次々と学術的に証明されつつあり、今後、さらなる研究の進展が期待されているところであります。

三朝温泉は、来年、開湯850年という節目の年を迎えます。三朝温泉では、この節目の年を契機として、恵まれた温泉資源を活用して「保養滞在型温泉“ゆったり過ごす現代湯治の郷”」を目指すこととし、温泉関係者のみならず、地域と連携した取り組みを行っているところでございます。むすびに、このフォーラムの開催に御尽力をいただきましたNPO法人健康と温泉フォーラム、そして新潟県阿賀野市ほか多くの関係者の皆様に感謝を申し上げますとともに、御出席いただきました皆様の御健勝と御多幸を祈念申し上げまして、御挨拶いたします。



白倉 政司
山梨県 北杜市長

本日、新潟県阿賀野市において健康と温泉フォーラム2013が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

北杜市は、山梨県の北西部に位置し、八ヶ岳、南アルプス、みずがき山、茅ヶ岳など日本を代表する山岳景観に囲まれ、国蝶オオムラサキの生息数の日本一を誇るように動植物の宝庫です。市内には3箇所の名水百選があり、ミネラルウォーターの生産量が日本一の名水の里としても誉れ高く、日照時間も日本一を誇る、まさに「山」「紫」「水」「明」の地と言えます。

北杜の地は、温泉も多く、特に増富ラジウム温泉郷は、日本有数のラジウム温泉の一つとして知られ、古くから湯治場として親しまれてきました。しかし、健康志向が高まる今日、温泉療法だけではなく食事療法や運動療法、それに周りの自然環境をも取り込んだ総合的な療養プログラムが必要となってきました。

現在、増富ラジウム温泉郷を新たに「健康づくりの郷」と位置づけその取り組みを進めています。

こうした中、健康と温泉フォーラム2013阿賀野市「ラジウム・ラドン温泉の広域連携による地域活性化」が開催されますことは、たいへん有意義でありこれを機に、全国屈指のラジウム・ラドン温泉で有名な温泉地と連携する中で、科学的エビデンスに裏打ちされた健康プログラムの開発により「健康づくり」へのなお一層の推進に努めてまいりたいと考えております。

結びに、フォーラムの開催に御尽力を賜りました関係各位に敬意を申し上げます、あいさついたします。



門脇 光浩
秋田県 仙北市長

健康と温泉フォーラム2013阿賀野市「ラジウム・ラドン温泉広域連携による地域活性化」が、新潟県阿賀野市において開催されますことを心よりお祝い申し上げます。また温泉の広域連携調印式が執り行われますことを大変うれしく思っています。連携調印を交わすことで民間と行政の連携がますます深まり、温泉を核とした観光振興や福祉・医療の充実など、地域振興に大きく寄与するものと期待しています。

秋田県仙北市は、角館の武家屋敷に代表される歴史と文化、田沢湖や秋田駒ヶ岳・八幡平といった自然環境に恵まれ、また玉川温泉や乳頭温泉など、多彩な泉質の温泉群で全国からお客様を迎える秋田県屈指の観光地です。玉川温泉は特別天然記念物「北投石」が存在し、その効能を頼って全国から多くの皆様が湯治に訪れます。この北投石は世界でも唯一箇所、台湾台北市内の北投温泉に存在します。北投石が取り持つご縁で一昨年、姉妹温泉を締結することができました。

この度の調印式を機に、交流の輪が未来永劫・時と距離を超えた絆を結び、温泉を活用した医療の研究が進むことをご祈念し、あいさついたします。



石田 耕太郎
鳥取県 倉吉市長

平成23年10月に日本の名湯百選、また、この度ラジウム・ラドン温泉広域連携に関金温泉を加えていただき厚くお礼申し上げます。

関金温泉は、鳥取県のほぼ中央、中国地方の名峰大山の東山麓に位置し、約1250年の歴史を持つ温泉です。他に類を見ない湯の美しさから、伯耆民談記(1742年編纂)に「銀湯」と記述され、以来、「白銀の湯」又は「白金の湯」と呼ばれています。

かつては、農作業で疲れた身体を癒す湯治場として、また、街道の宿場町として賑わった関金温泉も、宿泊客の減少や後継者不足等により活性化が求められています。

そのような中、日本の名湯百選の認定を契機として、「観光分野」「健康分野」「介護分野」を連携させ、保養温泉地として長期滞在者の増加をはかる新たなメニューづくりをおこなうとともに、地域住民に多く利用され親しまれる温泉地を目指す「関金温泉プラチナ(白金)プロジェクト」がスタートしました。これまでに、温泉の中で運動をおこなう、「湯中運動教室」や湯中運動の指導的な役割を担う「湯中運動リーダー養成講習会」を、国民健康保険事業や介護予防事業として実施してまいりました。湯中運動と食事をセットにした健康パックや、温泉と農業体験を組み合わせた取り組みも進んできています。また、このプロジェクトが契機となり、地元住民が“自分たちにもできることを”という声が集まりはじめ、10月には住民手作りのイベントである「関金温泉まちの文化祭」の開催が計画されています。関金温泉プラチナプロジェクトに、地域住民主導による「交流」が加わり、関金温泉は官民協働による温泉地づくりが一層進んでいます。

少子高齢社会の到来により豊かな高齢社会をどのように形成していくのか、温泉地の役割はどのようなものであるのか、関金温泉でも模索を続けています。

このたびの連携により、それぞれの温泉地の取り組み状況や課題などを共有し、さらに切磋琢磨することで、全国の温泉地のモデルとなる取り組みになるのではないかと期待をしております。

最後に、フォーラム及び調印式の開催にご尽力を賜りました、特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム及び地元開催実行委員会並びに関係各位に敬意を申し上げます、あいさついたします。

「ラジウム・ラドン温泉の健康効果」



山岡 聖典

岡山大学大学院保健学研究科
放射線健康支援科学領域教授

やまおか きよりの

1982年、電力中央研究所入所。理化学研究所研究嘱託・東京大客員研究員を兼務。1999年、同所上席研究員などを経て、岡山大学医学部へ。教授、医学博士(岡山大)・理学博士(早稲田大)。日本酸化ストレス学会評議員・日本ラドン研究推進協会副理事長など。東京工業大非常勤講師・金沢大招聘講師を兼務。専門は放射線健康科学・健康長寿科学。日本過酸化脂質・フリーラジカル学会学会賞(2005年)などを受賞。

例えば、ラジウム・ラドン(以下、ラドン)の放射能温泉は不老長寿の湯とも葉湯とも(健康長寿の湯とも)言われ、古今東西、多くの老若男女が治療や健康増進に利用している。我々は、この健康にとって有益とも考えられる低線量(200mGy未満(UNSCEAR))放射線の健康効果について、これが低線量放射線による生体の環境適応力の亢進と捉え、現象の確認と機構の解明を進めている。また、これを薬理学での有害な作用源が少量の場合に生体に適度な刺激を与え有益な効果を生じるとの考え方と捉え、医療や健康増進への応用の可能性についても研究を進めている。

すなわち、この有益効果として、内外の研究機関との共同研究を含む動物実験により、例えば9割が活性酸素に由来する生活習慣病(肝疾患・糖尿病・虚血一再灌流障害・高血圧症など)や老化の予防や症状緩和の可能性を確認しつつある。また、機構として、例えば、抗酸化機能・免疫機能などの生体防御機能、損傷修復機能、およびオートシス(細胞自爆)の活性化の可能性を解明しつつある。さらに、低線量放射線の医療や健康増進への応用の可能性として、臨床研究により、例えば、ラドン療法(温泉)効果に着目し、適応症(効能)の機構を脈管作動物質や鎮痛関連物質なども指標に加え解明しつつある。

その一環として、我々は三朝ラドン効果研究施設と鹿田ラドン吸入動物実験設備を学内に設置し、共同研究を進めている。

他方、放射線防護の考えとして、低線量域での健康リスクが未解明故に安全側のLNT(直線しきい値無し)仮説を採用している。本仮説で解決すべきは、発癌に至る多くの段階での抑制機構(抗酸化物質による活性酸素の除去・正確なDNA修復・細胞自爆による変異細胞の除去・免疫系による癌細胞の除去)の関与である。また、照射線量率(高線量率の急照射・反復照射、および低線量率(6mGy/h未満)長期照射)と健康リスクの関係(同じ線量でもこの順に影響は小)である。このため、我々は放射線健康科学の観点から検討している。その結果、下記最近の成果例のように、我々は本格的にラドン温泉の効能を実証(表)し、機構を解明(図)している。また、新たな効能の発見もしつつある。本講演では、これらを概説するとともに臨床研究の成果にも言及することにより、本題に代えたい。

すなわち、三朝医療センターでのラドン療法(全被曝量は約50-67μSvと推定)を模擬したマウスへのラドン吸入実験により、次の可能性が示唆できた。1)抗酸化機能が亢進し中性脂肪量が減少するなど、アルコール性肝臓障害を緩和する、2)血糖値増加・インスリン値減少・膵島委縮のそれぞれの抑制、抗酸化機能低下の改善など、I型糖尿病の症状を緩和する、3)炎症物質や疼痛様行動を抑制するなど、炎症性や神経障害性の疼痛の症状を緩和する、4)抗酸化ビタミン剤との酸化的肝臓障害の抑制率の比較を、肝機能・中性脂肪量・総コレステロール量・肝細胞壊死などを指標に検討した結果、機序は異なるもののラドン吸入の方がビタミンC・Eの通常摂取に比べより強い抗酸化作用を示す、5)多くの組織・臓器で抗酸化機能が亢進するなど、新たな効能の発見が期待される。他方、本研究では健康リスクを示すデータは得られなかった。なお、安全性を検証するためには、喫煙などの他の生活環境ストレス因子とのリスクの比較や放射線自身のリスクと利益の比較など

を定量的に評価することも重要である。

今後は、ラドン温泉には免疫調節機能や損傷修復機能の亢進、血液循環・細胞新陳代謝の促進なども期待されることから他の生活習慣病の症状緩和の可能性について、また改善効果のより大きいラドン摂取方法の最適化についても研究を進める予定である。

表 ラドン療法(温泉)の適応症(効能)例

- ・気管支喘息、肺気腫など呼吸器疾患
- ・関節リウマチ、変形性関節症など疼痛性疾患
- ・肝障害、消化性潰瘍、胃腸炎など消化器疾患
- ・高血圧、動脈硬化、糖尿病など慢性退行性疾患
- ・老人性疾患
- ・アトピー性皮膚炎、歩行系損傷後のリハビリ

基調講演-2

「温泉地の保養空間と地域振興」



下村 彰男

東京大学教授

しもむら あきお
1955年兵庫県生まれ。東京大学農学部林学科卒。(株)ラック計画研究所を経て、現在、東京大学大学院農学生命科学研究科教授(森林風致計画研究室)。専門は、造園学、観光計画、エコツーリズム、各地域の文化的景観などについて研究。環境省審議会自然環境部会委員、文化庁文化審議会専門委員、東京都環境審議会委員など。共著に『都市美』『人との環境学』『ランドスケープのしごと』『フォレストスケープ』など。

1. 保養滞在空間としての温泉地の再生

従来、温泉地は保養滞在空間であった。3週間もの長期にわたる滞在も見られ、わが国の伝統的なリゾートであった。そして長期の滞在が繰り返される過程で、温泉地には、滞在を退屈させないための様々な遊びや交流の仕組みと、来訪者を心から寛がせ、長期滞在を自然に促す空間が形成されていった。

こうした保養滞在空間としての性格は、戦前期頃までは保持されていたといえる。しかしながら、戦後の交通機関の発達に伴う周遊観光の進展(周遊観光に対する志向の高まり)や建設技術の進歩などが、温泉地を大きく変容させ、滞在保養空間としての性格も失われていった。その空間面での変容は、一口に言えば「まとまり(構造的)」の喪失である。旅館が大規模化する過程で、内湯化するとともに多機能化も進み、宿泊客が街(温泉地)へ出なくなるとともに、旅館と温泉地との関係も希薄化していった。また、近代交通機関、特に自家用車の普及により、来訪者の行動範囲が広範化し、温泉地自体もスプロールし、より開放的になり、保養滞在空間としてのまとまり(構造的)を失っていったと言える。観光に求められるものが変化し、滞在・滞留型観光への志向性が高まってきており、温泉地は保養滞在空間としての性格を再生していく必要があるのではないか。

2. 地域振興への展開

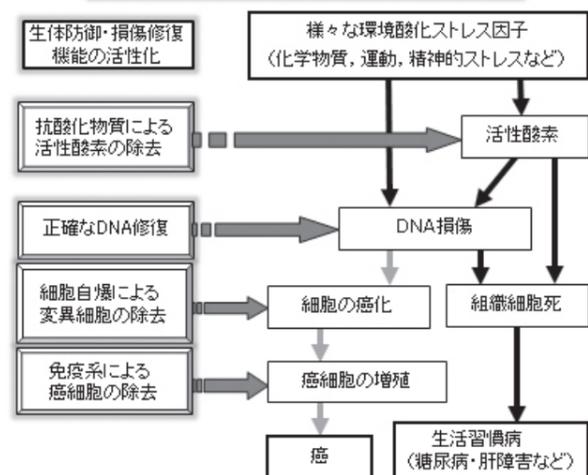
近年、「観光まちづくり」という表現を見る機会が多くなった。単に観光入込み者

数を増やし、産業としての観光を振興することだけを目指しても十分な成果を得ることは難しく、広く「まちづくり」として取り組んでゆくことが地域の活性化には役立つという考え方である。そして、観光志向の大きな変化が、こうした考え方を後押ししている。

この「観光まちづくり」を進めるうえで重要なポイントは、「まち(温泉地)」自身を資源と考えることであり、地域の魅力を住民で共有し、域外からの来訪者に上手に伝え、「まち」の魅力の保全や向上に協力してもらう状況を創り出すことである。そのためのキーワードは「個性」であり、自分たちの「まち」が他の「まち」と、どこが違って個性性的、特徴的であるのかを再評価し、地域の人々で共有することが重要である。どの「まち(温泉地)」も、各地域それぞれの自然環境に対応しながら、独自の歴史を歩んできており、その過程で地域ならではの生活文化(暮らし方、料理、祭り、景観等)を醸成してきた。しかしながら、近代化の過程で暮らしや空間(景観)の均質化が進み、地域の個性的な生活文化も忘れられ失われていった。まち自身の資源性とは、この各地域の個性的な生活文化であり、この再評価と共有は、地域の振興にとって重要なポイントである。

各地の温泉地は、温泉自身はもとより、地形や気象、立地条件も様々である。湯への入り方や滞在中の過ごし方、地域の食材を使った料理など、各温泉地ならではの個性を再発見し、磨いていく努力を進める必要があると考えている。

図 ラドン療法(温泉)による疾患抑制の機構仮説



官民協働による温泉地活性化— 温泉を地域資源として観光・交流口介護 “福祉事業へ”



**コーディネーター
合田 純人**
特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム
常任理事

こうだ すみと
世界保健機関(WHO)と公式関
係をもつ国際温泉気候連合アジア
太平洋協議会(FAMTEC)の事
務局長を勤め、アジア・太平洋地域の
温泉の社会的利用と保健的利用の
啓蒙・普及や国際温泉開発プロジ
ェクトに関わった。国内では自治体
や団体のアドバイザー・委員を歴任
。特定非営利活動法人健康と温泉
フォーラム常任理事。
編著書
「Thermalism in Japan(1988)、
「名湯百選」(1990)
「新・湯治のすすめ」(2009)
「温泉からの思考」(2011)、
「放射能泉の安全に関するガイドブ
ック」(2012)など。



ラジウム・ラドン温泉広域連携事業
は、2008年11月健康と温泉フォー
ラム2008「温泉を活用した医療
と地域の連携」(共催:鳥取県三朝
町、岡山大学三朝医療センター、
特定非営利活動法人ラドン温泉医
療三朝会議、特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム)で提案され
、翌年4月特定非営利活動法人健
康と温泉フォーラム、三朝温泉(鳥
取県三朝町)、増富温泉(山梨県北
杜市)、玉川温泉(秋田県仙北市)
等の関係者が発起人として「ラジウ
ム・ラドン温泉を利用した健康日本
推進連絡会議」を設立し、同年、健
康と温泉フォーラム2009「ラドン
温泉を活用した広域連携による地
方再生」(於いて東京科学技術館)
を開催いたしました。

このように、加盟温泉地の連携に
より、地域共通の資源ラジウム・ラ
ドン温泉の健康への活用や地域活
性化の取り組みを協議し、相互に
補完できうる有機的な広域ネット
ワーク化を進めてまいりました。その
後、村杉温泉(新潟県阿賀野市)と
関金温泉(鳥取県関金温泉)が新
たに加盟し、特に2011年東日本
大震災に伴う福島原発事故による

風評被害対策として、各温泉地が協
働し「放射能泉の安全に関するガイ
ドブック」を出版し、大きな話題と利
用者の信頼に答えることができました。

全国の温泉地では、地域社会の疲弊
と、健康に対する社会的関心の高ま
りの中で、温泉資源の新たな活用
に向けた様々な試みが行われている中
、本事業は、全国の温泉地でも地域
活性化の為に広域連携事業として、
注目され、大きな関心を喚起してお
ります。

今年、加盟温泉地の新潟県阿賀野
市と地元温泉関係者の呼びかけで、
健康と温泉フォーラム2013「ラジウ
ム・ラドン温泉広域連携による地域
活性化」を開催する機会に、各連携
温泉地首長が集結し、広くその成果
や具体的取り組みを、全国の温泉地
関係者と市民に情報発信するため、
本事業の広域連携調印式を行いた
く、ご多忙中とは存じますが、ぜひご
臨席たまわり、さらなる本事業の発展
と観光から健康づくり、介護福祉事
業への横断的な取り組みと官民によ
る新たな温泉地活性化の可能性を
探ってまいりたいと思います。

◆世界有数のラドン温泉◆
■源泉数 65~80程度
■泉質
・含放射能/ナトリウム・塩化物泉
・含放射能/ナトリウム・
炭酸水素塩泉
・含放射能/単純泉

□温泉分析(例)
源泉名:三朝町有混合タンク
泉温:65.9℃
湧出量:229l/min
PH値:6.9
ラドン:39.5x1010Ci/kg

・ラヂムリエ(入浴アドバイザー)の養成
・医療と連携する『三朝温泉現代湯治』
フリータイムプランとメディカルチェックプ
ラン

◇岡山大学病院三朝医療センター
設立:1939(昭和14年)
「岡山医科大学三朝温泉療養所」
診療科:内科、リハビリテーション科
病床数:60床(休止)

◇鳥取県中部医師会立三朝温泉病院
設立:1939年(昭和14年)
「軍事保養院傷痍軍人三朝温泉療養所」
診療科:内科、神経内科、整形外科、リウ
マチ科、リハビリテーション科等
病床数:一般病床83床、療養病床95床

・ノルディック・ウォーク
・ラドン熱気浴の観光客への体験提供
(NPOみささ温泉)
・鉱泥湿布の観光客への体験提供
(岡山大学)

■3 三朝温泉開湯850年記念事業の
取り組み
・2014年は、三朝温泉開湯850年。2013
~2015年の3年間記念事業を実施
・三朝温泉の将来像『保養滞在型温泉

“ゆったり過ごす現代湯治の郷”』
・原点回帰『三朝温泉の資源は、「他
に類を見ない特徴的な泉質の良さ」』
・一過性のお祭りではなく、次につなが
る取り組みを!!

・テーマ
◇発信...開湯850年を契機に三朝
温泉ブランドを全国へ
◇変革...時代のニーズにあった三
朝温泉へ
◇創造...オンリーワンの魅力アップ
◇再生...三朝温泉ブランドにふさ
わしい温泉街へ
◇連携...地域と連携して新たな観
光のまちの創出

■4 旅館協同組合青年部の今後の
取り組み
・Nordic Walk+ゴロゴロ体操
ノルディックとゴロゴロ体操
温泉でゆったり過ごしながら身体を
リフレッシュ
・三朝温泉病院との連携したノルディ
ック・ウォーク
健康増進とメディカルチェックを複合
した保養型プラン

増富温泉峡における 療養保養を目的とした観光振興策



小山 芳久
一般社団法人護持の里たまゆら
代表理事

「増富を統合医療の実践の場にする」こ
の目的のために取り組んできた過程を
報告いたします。

まずは自然療法を実践する場の開拓
をしました。瑞牆山・金峰山という
1000万年前に隆起した豊富な鉱物
質ある山に囲まれた増富地域ですが、そ
れらの山の支流から流れる川の合流点
に本谷川があります。

1. その合流点での養生法は樹林気功
を中心とした邪気や病気を払い落とす
体験をする場として位置づけております。
2. 瑞牆の杜での気功体験は潜在意識
の活性化、脳幹の活性化をして、動物と
しての本能を高める体験をします。
3. 「赤い」川として昔から注目されて
いた場があります。裸足で川の中に入り足
ツボからのエネルギー療法を体験でき
る場です。
4. 宿泊施設のリーゼンヒュッテの裏山
は、精神的・神経的保養の場として最適

な場を作りました。
5. 増富が多自然農法の仕組みづくり
とは、活性力を持った腐葉土づくりの
為、終秋には広葉樹を集め冬の間、堆
肥場で熟成をさせ、春先にワイナリー
からのブドウの皮を加え、更に源泉水
を基に作ったBMW(バクテリア・ミネ
ラル・ウォーター)を加えさらに熟成した
堆肥を作り、これを農地に撒きます。
また、地元山梨大学との共同研究によ
るBMW(バクテリア・ミネラル・ウォ
ーター)を使い光合成によるクロレラを
精製し、農地に撒くことにより微生物や
微量の鉱物質が豊富に含む化学肥料
・農薬を撒かない農地作りをしていま
す。
この自然農法にて育てた野菜や、山野
草で健康的な食事大自然のエネル
ギーを吸収する仕組みを作り上げたい
と思います。地産地消としての取り組み
として、

保養滞在型温泉“ゆったり過ごす現代湯治の郷”を目指して



知久馬 宏平
三朝温泉旅館協同組合
会計理事

■1 三朝温泉について
1164年
白い狼の導きにより三朝温泉発見
1916年(大正5年)
ラジウム含有量日本一と発表
(旅館数約12)
→各地方から入湯客が急増
1955年(昭和30年)
厚生省「国民保養温泉地」の指定
→健康増進・保養湯治の温泉地へ
(旅館数約24)
1969年(昭和44年)
厚生省「国民保養温泉地」の指定解除

→一般の観光温泉地への転換
(旅館数約46)
1986年(昭和61年)
宿泊客数 約54万人(旅館数40)
1996年(平成8年)
宿泊客数 約55万人(旅館数35)
2012年(平成24年)
宿泊客数 約33万人(旅館数25)

■2 現代湯治の取り組み
・三朝温泉現代湯治推進協議会の
設置
・現代湯治モニターツアーの実施

・春から夏にかけては、野菜・山菜と山魚が中心の食材
・秋はキノコ・果物を中心にし、冬はジャガイモ・サツマイモ等の穀類を中心とした食材を心がける。

1から5からの仕組みは、いずれも増富地域における大自然の恩恵を授かった貴重な宝物です。そして、増富での自然療養体験をした後、増富の源泉浴をすることで、心と肉体のバランスのとれた健康バランスに食養生の世界を加えた健康的な環境の中に身を置くことにより、自然治癒力がよみがえるお手伝いをしたいと思います。そしてこれらの自然療法としての仕組みづくりの要となるのが、ISLIS(国際生命情科学会)にあるエネルギー療法とその研究開発を目的とした生命力活性研究会での監修と指導です。増

富温泉研究会の柱として、研究者の実践の場・研究の場として増富地域を活用してもらいます。また、提携先である家族楽園大学研修センターに「統合生命科楽センター部門」を設立し、専門家による研究成果を発表するための場や自然療法講座を開催していきます。そして医療機関とは、メディカル検査を行ってもらい適切なアドバイスをしてもらえる関係を結ぶことにより利用者への信用力を積み上げていきたいと思

います。以上、これからも増富地域の特性を生かした取り組みを自然療法の実践の場として作り上げ、冒頭に申しあげた「増富を統合医療の実践の場にする」ことを実現していきたい。

パネルディスカッション

笑顔あふれる湯治場「玉川温泉」



畠山 米一
社団法人玉川温泉研究会
理事

玉川温泉は、十和田八幡平国立公園の中に位置し、ぶなの原生林に囲まれた自然豊かな環境であります。806年の焼山の噴火で噴出した温泉で、p.H1.2の日本一の強酸性泉であり、1ヶ所の源泉から毎分9,000リットル湧出しておりこれも日本一であります。

玉川温泉は塩酸を主成分とした極めて珍しい強酸性の塩化物泉であり、温泉の中にラジウムが含まれております。この温泉成分が長い年月を経て沈殿して作られる特別天然記念物「北投石」が今でも生成されています。北投石は台湾の北投温泉と玉川温泉の世界で2カ所しか確認されていない大変貴重な財産であります。北投石が縁を結び2011年8月、玉川温泉と台湾の北投温泉は姉妹温泉として温泉協定を締結し、秋田県知事、仙北市長、玉川温泉が署名しております。玉川温泉の源泉近くは火山ガスが噴出する岩場となっており、50℃前後に温められた岩盤の上に横たわる「岩盤浴」が非常に人気です。この岩盤一帯は地中の北投石から放出される微量の放射線(0.1 μ sv/h \sim 2.5 μ sv/h)が測定され、岩盤の温熱と微量の放射線の相乗効果がからだに良い作用をもたらすと言われております。

岩盤浴は、50年以上も前に玉川温泉の湯治愛好者が始めたと言われており、その輪が湯治客に広まり現在の岩盤浴スタイルになりました。今では全国各地に岩盤浴施設が造られておりますが、玉

川温泉の天然の岩盤浴は、湯治客が作り出した玉川温泉の文化ともいえるものですので、この文化を守り継続していかなくてはならないと思っております。その目的を遂行するために、玉川温泉の4つの旅館で玉川温泉岩盤管理協会を組織し、会費を負担し合って維持管理を行い、一般にも無料で開放しております。玉川温泉の湯治客は、糖尿病やがんを患った方が多く見受けられますが、温泉に浸かりながら、岩盤浴をしながら、食事をしながら、湯治客同士で交流が深まり、病気を患っているとは思わせない明るい表情で湯治しているのも大きな特徴です。近年は岩盤浴を体験しようと観光客も増えて来ておりますが、岩盤浴地は、皆笑顔で汗を流しております。

しかし、玉川温泉の岩盤浴は、2012年2月に発生した雪崩事故により、冬季の岩盤浴地は閉鎖しております。多くの湯治客から冬季も再開するよう要望が寄せられておりますが、安全対策が確立されるまでは冬季再開の目処がたっておりません。管轄する行政機関(環境省、林野庁、文化庁、秋田県)の許認可も一層厳しくなり、夏場の岩盤浴地の開放にも影響がでてきている状態です。岩盤浴を必要とする湯治客のためにも、文化を創り出した愛好者の皆様に応えるためにも、冬季も安全に岩盤浴ができるよう、そして笑顔があふれる湯治場を目指して、原点に立ち返り「湯治のふるさと」となるよう取り組んでいきたい。

パネルディスカッション

五頭温泉郷～開湯1,200年 弘法大師開山の新潟県最古の温泉地～



荒木 善紀
五頭温泉郷旅館協同組合
副理事長

■1 五頭温泉郷の環境

新潟県阿賀野市「五頭温泉郷は、県都新潟市から福島・会津若松方面へ約30 km、米どころ蒲原平野の東端に位置し、「出湯温泉」「今板温泉」「村杉温泉」の3つの温泉地で形成されています。弘法大使が5つの峰それぞれに仏像を安置したとされる霊峰「五頭山の麓に連なる五頭温泉郷は、五頭連峰県立自然公園内にあり、一帯は「全国森林浴の森100選」にも選出されています。付近には、新潟平野や佐渡ヶ島をも一望できる五頭山頂への多数の登山ルートをはじめ、句碑や歌碑が250基余り立ち並ぶ文化の道「やまびこ通り」(林道100選農林水産大臣賞受賞)や「五頭薬用植物園」「五頭山麓いこいの森」等、豊かな自然資源を活かしたレジャー施設が整備され、健康的な温泉滞在環境を提供しています。平成23年度から24年度にかけて実施された第2回新潟県観光地満足度調査にて5部門で満足度第一位を受賞致しました。

■2 五頭温泉郷の歴史と温泉文化

(1)出湯温泉

出湯温泉は809年に弘法大師が錫杖をついて湧出させたという伝説が残り、開湯1200年の県内で最も歴史がある温泉で、そのお湯は今も華報寺境内の共同浴場の源泉として湧き出ています。当初はお湯場に宴銭を捧げてお参りをしていたと伝えられ、鎌倉時代には幕府に温泉税を納めていたという記録も残っています。その後、湯治場として発展し、役人が多く訪れる保養地として一躍脚光を浴びようになり、竹久夢二や折口信夫等、数多くの文人墨客もその足跡を残しています。最近ではアトピー性皮膚炎に効果がある温泉として全国に知られ、治療に訪れた人達の中にはその効果からこの地に定住された方も多くいます。「華報寺共同浴場」「出湯共同浴場」「弘法の足湯」等の外湯があり、連日多くのお客様が訪れてます。

(2)今板温泉

今板温泉は、出湯温泉と村杉温泉の間に位置する一軒宿の温泉地です。国道290号から、杉に囲まれた細い道を山へ向かって分け入ると、静かにたたずむ宿と薬師堂が目に入ります。弘法大師が五頭山を開いた時に、この地に自噴していた源泉を発見したことがはじまりといわれ、薬師堂にまつられている薬師如来像も弘法大使によって刻まれたと伝えられています。宿を囲む竹林や老杉古松をわたる風の音、野鳥のさえずり、緑のにおい等が心にうるおいを与えてくれる温泉地です。

(3)村杉温泉

村杉温泉は、678年前の建武2年(1335年)、足利家の武将であった荒木正高が戦乱を逃れてこの地に着き、薬師如来のお告げによって発見されたと伝えられています。現在の源泉1号井及び2号井の後方石段を登ると、この荒木正高が建てたといわれる薬師堂が今も残り、当時の面影を感じさせてくれます。温泉地から離れた場所に村杉遺跡があり、旧石器や縄文式土器が発掘されていることから、もともとの村杉集落は数万年の歴史とともに現在とは別の村杉遺跡の場所であり、温泉の発見をきっかけに当地に移住し、今の村杉温泉街ができたと考えられます。大正3年には、新潟大学の薬学士中山蘭教授らによって温泉成分が分析され、ラジウムの含有量が世界記録にあると示されたことから、当時の新聞等で大々的に報道されました。また、古くから多くの文人、墨客らに愛され、近衛文麿、橋本閑雪、河東碧梧桐、相馬御風、野口雨情等々、名士達の書や手紙等が今もこの地に残されています。ラジウムを多く含み、特に婦人病に効果があることから「子宝の湯」としても知られており、温泉街には「共同浴場薬師乃湯」を中心に「村杉共同露天風呂」「薬師の足湯」「飲泉所」等が整備され、四季を通じて多くの方に利用されています。

3 五頭温泉郷の取り組み

(1) 周辺の自然資源を活かした健康増進型保養温泉地づくり

五頭温泉郷が位置する阿賀野市笹神地区では、「ゆうきの里」宣言を行い、環境にも優しい資源循環型農業による有機米の生産が定着している。市と農協はパルシステム生活協同組合連合会(旧 生活協同組合連合会首都圏コープ事業連合)と「食料と農業に関する基本協定」を締結する等、安全で安心な食が提供されています。また、健康寿命延伸日本一を目標に掲げる阿賀野市は、健康づくりや介護予防のため「ノルディックウォーキング」や市独自の「シャキイキ呼吸法」をはじめ、年齢や体力を問わずに取り組める各種健康法を推進している、市民に定着してきています。当温泉郷は、こうした「食」「運動」と「温泉や「自然環境を結び付け、温泉地にある食と緑の交流センター「うらの森」の情報発信や体験学習のための施設を拠点に「温泉」「自然散策」「森林セラピー」「ラドンセラピー」「ウォーキング・ノルディックウォーキング・トレッキング」「体験」「健康食」等を総合的に提供できる健康増進型保養温泉地づくりに努めています。

(2) 五頭温泉郷エコ計画

常に新鮮、そして安全で安心な食を提供できる温泉地であるために、五頭温泉郷内で使用するシャンプーや石鹸を生分解性の高いものに替え、また使い捨てていた割りばしを洗って繰り返し使える天然木の塗り箸に切り替える等、環境に配慮する事業に早くから取り組み、平成15年には、環境省環境管理局水環境部長や阿賀野川水系水質汚濁対策協議会から優良団体として表彰されました。

(3) 村杉ラヂウム温泉風景利用策の復活

大正10年に日本初の林学博士である本多静六先生が当温泉郷を訪れ、ラジウム温泉と雄大な自然環境を活用した壮大なる計画「村杉ラヂウム温泉風景利用策」が提案されました。この提案には、当温泉地一帯の土地利用計画が示された平面図も添付され、ラ

ジウム温泉の効能はもちろん、森林浴のための登山道、遊歩道、展望台等の整備や活用法、そして名物品や土産物に至るまでの時代を見こした理想的な温泉地整備計画が描かれていました。五頭温泉郷では、100年近く実現できなかったこの構想の復活・実現を目指し、平成23年度より五頭山麓緑資源ワークショップ戦略事業により地域をあげて遊歩道の整備事業等を進めていて、薬草や草花の植栽等を行い環境整備に努めているところです。

(4) アンチエイジングキャンプ

アンチエイジングの第一人者である順天堂大学大学院白澤卓二教授に監修いただき、ラジウム温泉と周辺の自然資源を活用したアンチエイジングキャンプを開催しています。内容は、白澤教授による講演会をはじめ、プロスキーヤーで登山家の三浦豪太氏による川魚掴み取り体験・沢登り体験、そしてトータルフィットネスコーディネーターの中尾和子先生によるボールエクササイズや温泉入浴指導員による正しい温泉入浴講座等、「食・運動・生きがい」をテーマに毎年実施しています。

4 五頭温泉郷の今後の構想と展開

国民の観光ニーズは益々多様化し、また観光地の果たすべき役割も多岐にわたる中、五頭温泉郷では、地域の自然・歴史・伝統・文化等の再確認、再発見、再探求に努め、点在する豊富な資源を結び付けて有効活用することにより、この地域ならではの付加価値を付けた「五頭温泉郷ブランド」を確立することが急務となっております。併せて、今後は少子高齢化が全国的に課題となる中、福祉や介護に対する取り組みも進め、社会問題にも貢献できる、魅力あふれる温泉地滞在環境づくりを目指します。結びに、阿賀野市そして当五頭温泉郷がラジウムを通じて全国の先進温泉地と連携し、またご指導を賜りながら今後の観光地づくりを図れることはこの上ない喜びであり、当フォーラム開催に当たってご尽力をいただきましたNPO法人健康と温泉フォーラム、そして遠方から足を運んでいただきました関係各位に敬意と感謝を申し上げ、五頭温泉郷の紹介とごあいさつとさせていただきます。

パネルディスカッション

「関金温泉プラチナ(白金)プロジェクトから人の一生に寄り添う温泉地を目指して」



木藤 隆親
倉吉市企画振興部
観光交流課 主任

きとうたかちか
1976年福岡県生まれ。島根大学教育学部音楽課程卒。2003年倉吉市役所。観光交流課主任として関金温泉の振興に携わり、「観光」「健康」「介護」分野が連携した「関金温泉プラチナ(白金)プロジェクト」を提唱、推進している。今年からは、地域住民を巻き込んだ「交流」が加わる。人の一生に寄り添う関金温泉の新たな文化を創り出すべく奮闘中。温泉第81巻(日本温泉協会)に寄稿。

「うちの旅館は、地元の人が誰も紹介してくれんげえ・・・。」
関金温泉は、約1250年の歴史を持つ古湯で、かつては、山陽と山陰を結ぶ街道の宿場町として、また、農業地帯を支える湯治場として賑わっていました。類まれな湯の美しさから「銀湯」「白金の湯」とも言われています。
しかし、旅館の廃業が続き、現在は、4軒の旅館が残るのみとなっています。

旅館の主人が私に語ったこの言葉は、関金温泉の現状そのもののように思えます。地元の人が関金温泉を誇りに思っていない現実を突き付けられた気がしました。地元の人に愛されていない温泉地の寂しさ、なんとかしたいと思いました。

平成23年10月に日本の名湯百選に出していただき、これを契機に、関金温泉が地元の人に親しまれ、利用される温泉地を作りたい、と「関金温泉プラチナ(白金)プロジェクト」を関金温泉旅館組合とスタートさせました。

このプロジェクトは、「観光」「健康」「介護」分野を連携させ、保養温泉として長期滞在者を増やそう、という取り組みです。この取り組みが少しずつ広がり、地元の人が関金温泉に関わるようになってきました。新たに地域住民の「交流」分野が加わってきたと思います。

人生の中で、ライフステージが変化す

るごとに生活拠点が変わっていくと思います。誕生した後は「家。育ちざかりは「学校」。大人になると「職場」。退職後は再び「家」に戻り、歳を重ねると「介護施設」、「医療機関」へと変化していきます。

それぞれのライフステージで過ごす生活拠点は、分断化されているのではないかと感じます。学校には高い門、職場はIDカード、介護施設・医療機関は関係者以外面会禁止・・・このことは、ライフステージの変化によって、自分の友人関係やコミュニティーが分断されることを意味していると思います。

それぞれのライフステージに、「温泉に行く」という行動があったら、と思わずにはいられません。生活拠点が変わっても、温泉に行けば友人に会える。地域の情報が共有できる。回覧板が回ってくる。歳をとっても、子どもの声を聴くことができる。そんな温泉地があったならと思います。

関金温泉プラチナ(白金)プロジェクトが、一層深化し、関金温泉が地域住民にとって親しまれ、愛され、誇りに思える“居場所”を作っていきたいと考えています。人の生活のすぐそばに温泉がある、寄り添ってくれている、そんな“居場所”を求めて走り続けます。

風土に活かされる温泉地— 五頭温泉郷地域形成試論(要旨)



森 繁哉
地域哲学研究所代表
NPO健康と温泉フォーラム
理事

もり しげや

新潟県阿賀野市の南東に位置する「五頭温泉郷」は、霊山として名高い五頭山の麓に点在する村杉温泉、今板温泉、出湯温泉の三温泉を擁する、新潟県最古の温泉地である。この温泉郷の温泉地形成の試論を委託された「健康と温泉フォーラム」は、温泉郷の風土的、歴史的、地域形成論的観点から現地調査を行い、当、温泉地の固有性や将来展望を見据えた地域活性化試論をまとめることになった。今回発表する「五頭温泉郷地域形成試論」は、その論考を要約したもので、温泉地が将来展望として、このような方向付けで活性化されることが望ましいのではないかとする視点の方向を述べるものである。もちろん、温泉地形成という総合展望を考察していくことは、単に、一面的な風土論や自然条件論だけで切り出すものではないことを十分に承知している。それは、温泉の科学的条件、それに付随する温泉医学的観点、また生業論、経済動向論的な多様な観点から、温泉と温泉地、そしてそこに住む人々を捉え、かつ観光地として成り立っていく施策の側面を捉えていかなければならないだろう。そうした総合視点が、温泉と温泉地を地域の人々のものにして、かつ温泉地を訪れる人々が存分に楽しんでいける、真の温泉地と成る条件でもあるのだ。そうしたことを十分に承知して、今回の論考を提言性を持った視点の解説に集約させ、その後最終「論考」として、総合的プランを、五頭温泉郷に提出することになるであろう。

1、視点の方向条件

今回の地域形成試論は、健康と温泉フォーラムが提唱する、ラジウム・ラドン温泉を中核に据えた温泉活用の範疇で作成されるもので、五頭温泉郷をラジウム・ラドン温泉の基地として捉え、かつ、それらの要素を最大限に活かしていくには、どのような温泉地形成を目標にすべきなのかといった条件によって考察されていくものである。しかし、五頭温泉郷がこうした条件を選択したことは、温泉地の将来にとって誠に望ましく、まさに五頭温泉郷が採るべくして採った「温泉地形成」の最良の方向ではないかと思える。

2、温泉地の現状分析

五頭温泉郷(以下、温泉郷という)は、その歴史的推移や、これまでの温泉地経営の実施がら、相当に、基礎的条件が蓄積されてきている温泉地といえるだろう。新潟市から、車で40分の範囲内にある地理条件や、五頭山という、県民に親しまれてきた名山の麓であることなど、温泉地を位置づける外的な基礎条件は、すでに、この温泉郷を性格づけている。ここでそうした基礎条件を、ふたつの視点から列記して、温泉地の現状が、そうした基礎条件に沿っているのか、また、なにか不足しているのかを考察して、将来展望へ至る視点の提言としたい。

その1、五頭山との関わりについて温泉郷を特徴づけるひとつの視点として、温泉郷が、五頭山の麓に横断的に広がるという地理的条件が上げられる。この地理的条件は、温泉郷の生命線とも云うべき、極めて重要な外的条件である。まず、温泉地を俯瞰して印象付けられることは、五頭山の延長線上に沿って形成された「山の麓」の温泉地ということである。このことは、温泉地の特徴を、奥行き空間ではなく横広がり空間という空間特性の場になっている。日本の温泉地が、「奥行き」という聖地形成をモデルにして街が形成されているのだとしたら、この温泉郷は、地形の特徴上、横に伸びていく温泉街(旅館等も含め)、を作らざるを得なかったのだ。そして、奥の五頭山こそ温泉街の奥、聖地になっているのであって、五頭山が街の景観に取り込まれているのである。こうした空間形成の温泉地は極めて珍しく、特に温泉郷にあっては、もはや五頭山は、温泉街、旅館の一部にさえなっている。温泉郷は五頭山信仰の歴史によって発展してきたが、温泉郷はむしろ五頭山の一部ですらあって、五頭山との関係性が、当温泉郷の位置づけを決定するといっているだろう。そして五頭山は、温泉郷の地理条件だけでなく、内実においても温泉郷を性格づけている。五頭山からの伏流水が、「前山」といわれている地域内の里山によって堰き止められ、温泉郷の風辺には、非常に豊かな湧き水が湧出している。そして、この扇状地が豊かな水を湛えた田

園地帯となって、新鮮な米や野菜などが地域特産品として地域の産業を育成しているのである。更に、景観上においても、田園地、温泉地、五頭山地という三層構造が見事に形成され、まさに、山と調和しながら歩んできた温泉郷であることがわかる。

また、五頭山という極めて特殊な空間は、この温泉郷の歴史そのものであって、温泉郷がどんな形成史を辿ってきたか、どんな発展の仕方をしてきたかを確実に物語っている。村杉温泉にあっては、中世武士団の地方定着史によって、温泉掘削の技術を持った技芸武士が、この温泉地を開湯した歴史を喚起するし、(後に、古文書などによって明らかにする)その武士集団が、修験者として、五頭山信仰の基礎を作ったのではないかと推察される。事実、「村杉の湯」(大正4年、村杉温泉組合発行)には、そうした形跡を記した記述が多い。(この本には、五頭山を「端山」と表記し、五頭山が葉山(端山)信仰の山であったことを物語っている。)それに、ラジウム、ラドンを含有するという強力な磁場(温泉)を自己に取り込んでいく力は、山を知りつくし、山のエネルギーを自在に操る職能武士の面影を彷彿させ、村杉温泉が、そうした技術の民の温泉であったことは明白である。一方、今板温泉にあっては、五頭山登拝の登り口であったことが証明されており、この温泉地も五頭山との関わりによって発展してきたのである。又、この温泉地は、登拝口に広がる山裾野を農耕地として利用してきた定住方の職農民の形跡を留め、工芸品などを制作する半農、半職人の村が形成されていた経過を留めている。こうした集落の形成史を今後は歴史的に明らかにし、今板温泉と五頭山の関係史を辿らなければならない。更に出湯温泉にあっては、この地方の代表的な「葉山信仰」のメッカであったことが、歴史的にすでに明らかにされている。温泉街も、五頭山を中心に据えて形成され、「華報寺」という仏教系の寺院が現在も存在し、そのお寺に参るたくさんの方々が、温泉というもうひとつの聖地に向かって移動していた事実を知ることができる。同時に、温泉街の構造も、参道、登山口、寺院、旅館、店、道場などの門前町形跡が偲ばれ、歴史遺産地としても、たいへん貴重な場所である。こうした、信仰と地域の形成史を直接的に辿れる場所として、また、山岳信仰の民俗学上の精神史を濃厚に辿れる場所として、この温泉地が極めて貴重な歴史遺産であることは、明白である。

その2、温泉の近代史を辿れる場所としてもうひとつ、五頭温泉郷における際立った特徴は、この温泉郷が、大正や昭和の初めの近代型の温泉地として、新潟県内における代表的温泉地であったという事実である。新潟市から近いという地理的条件は、新潟市が海の交易の街として栄えていくのと同時に、この都市の奥座敷的存在として、温泉郷も近代文明の進展を取り込んでいったのだ。この温泉郷は、歴史的伝統を持続する一方、近代文明の果敢な摂取地としても、時代の進展に敏感に反応していく温泉地であったのである。多くの芸妓衆も抱え、最新の乗り合いバスなども、県内においては最も早く導入されるなど、新しい文明に対する受容の方向が、とても

速いのである。また、そうした文明への柔らかな対処の姿勢は、この温泉郷が、これまでに導入してきたさまざまな温泉地活性化施策にも現れており、近代型の温泉地に脱皮しようと模索した温泉郷の先人たちの心意気を感じさせもするのである。例えば、日本の造林学、造園学の基礎を築いた、本多静六博士(1866~1952)が村杉温泉の保養地形成に言及し、この地に理想の温泉郷を夢見た形跡や、そのことを引き継ごうとして、村杉温泉の集落組織が地道に遊歩道の整備等を行っている事実は、この温泉郷が、常に風土条件を経営に取り込もうとする意欲の表れとして高く評価されるものであり、こうした意欲は、あの職能武士団を支えていた高い精神性にも繋がるように思える。こうした、温泉地形成へ向けた温泉人としての誇りが、この温泉郷を、ラジウム・ラドン温泉の基地へと向かわせていったと思えてならない。

3、五頭温泉郷形成に向けての提言

これまで述べてきたように、この温泉郷は①歴史的現象の蓄積を持って、②新しい温泉地を作る意図を實踐してきた温泉地であると定義づけることができる。もちろん、この外にも、温泉地を性格づけるさまざまな基礎条件が存在するのだが、地域は風土条件の内にあるという命題に沿って、この提言を考察してきた。こうした視点は、先に述べたように、風土の特異性に縛られてしまうこともあるのだが、五頭温泉郷にあっては、土地条件を最大限に温泉地形成に活かしていく方向が最も望ましいのではないかと思える。温泉郷のこれまでの経過や施策の蓄積を考慮しても、ラジウム・ラドン温泉基地としての性格を将来展望に据えていく視点にあっては、この温泉郷は、風土に開かれた、風土に活かされた、風土の温泉地として、その展望を辿っていくのが温泉地の本筋のようにも思える。こうしたことを考慮して、温泉地形成へ向けてのラフスケッチ風「提言」を箇条書きに列記していく。

- 1 ラジウム・ラドンを含有する温泉地としての方向を明確に位置付けていく。
- 2 そのための、下地として、三温泉地が明確な温泉郷を形成し、連携を強めていく。温泉地を構成する旅館や商店などの意欲と合意形成が活性化の鍵になるのではないか。(旅館や商店を廃業していく速度が、少々速い印象もあるが、地域合意がどのようにとられているのであろうか。)
- 3 村杉温泉の集落自治組織の強い結び着きが印象的であるが、こうした地域の人々との共同歩調が、温泉地形成の基礎になる。
- 4 先に述べた地形上の三層構造を、明確に温泉地形成に活かしていく必要がある。例えば、温泉地に入るルートの吟味や施策の提案。

5 これまでも試みられてきたのであろうが、地域の生業形態を積極的に温泉地形成に取り入れていくことの継続。例えば、農産物、工芸品の温泉地消費と「食と温泉」などの位置づけ。

6 養生へ向かう、養生を目的(健康という概念も)にすることができる地というイメージが定着しつつあるので、こうした方向のイメージづけが急務である。

7 五頭山登山を目指す日帰り客が相当数にのぼるが、こうした日帰り客の滞留を促していくだけで温泉郷への入込み客が上がっていく下地が、すでにある。このための抜本的な施策の展開が急務である。

8 先に述べたような五頭山の伏流水による、極めて純度の高い湧き水を、「水と温泉の里」のように位置づけ直していく。と同時に、この水を採取する人々が、温泉地とどのように関わっていけるか(宿泊など)を考察することも大きな施策のひとつになる。

9 先に述べたような、五頭山信仰のメッカである街並みの新たな形成とトータルプランの作成。歴史的建造物への関心などを喚起する。

10 すでに試みられた活性化策、例えば「俳句ロード」などをソフトとして活かしていく施策の検討。この外にも露天風呂などの活かし方。

11 各旅館が抱える、それぞれの歴史的、風土的「物語」を温泉郷全体で共有し、イメージ化する「温泉起源譚」の創設と活用。

12 温泉郷を訪れている多くの文化人が残っていた遺産、例えば、竹久夢二、折口信夫などと旅館の景観(大正ロマン風)を結びつける文化施策の検討。

13 温泉郷を、これまでに形成してきた旧行政区単位の文化施設(例えば、民俗資料館など)を積極的に活用していく文化施策の検討。温泉郷に在る「五頭の麓のくらし館」などは、地方の民俗資料館としても、その価値は、相当に高いので、こうした文化施設の観光利用を再検討する必要がある。

14 優れた人的資源といってもいい地域在住の研究者が、大変丹念に地域の固有性、特異性を踏査している現状は、温泉郷のもうひとつの特質といっている程の文化である。こうした先見性を持った地域人を中心に、講座や研修会を、地域内、あるいは外に向けて発信していく必要があつて、大変な観光素材にもなり得る。

以上、極めて素描的に、温泉郷の目指すべき方向性への提言を述べてきたが、こうした温泉郷形成の鍵を握るのが、地域の温泉人というべき、温泉施策の担い手の方々である。これまで、この温泉郷ではさまざまな地域形成事業が試みられてきたし、その実績は、確実に地域に浸透していると思える。今後の温泉郷形成にあつては、そうした蓄積を、更に深化させる方向にしていくのが有効であると思える(継続の力)。そして、そうした施策を担ってきたのも地域の温泉人なのである。こうした温泉人こそ顕彰されるべきであると思えるし、五頭温泉郷は、そうした人材の総和の上に成り立っている「人の温泉」ともいべきなのである。こうした人の総和が、更に、温泉地形成に向けて努力できる土壌と仕組みづくりが、今後、温泉郷にとっては最も大切な施策中の施策にもなるように思えるのだ。

資料編



三朝温泉



■はじめに

湯と山のまち三朝町は、天与の温泉と町の総面積の約9割が森林という豊かな自然と清らかな水に恵まれた町です。三朝温泉は、1164年(平安時代)に、白い狼の導きによって発見されたと伝えられています。株湯といわれるこの元湯は、今でもこんこんと湧き続け、多くの湯治客が訪れています。

三朝温泉の源泉は、自噴泉、町の配湯源泉あわせて65ほどあり、温度は40~70℃が大半を占めます。三朝温泉では、源泉かけ流しの風呂を有する多くの旅館や、歩行浴槽や蒸気風呂、オンドル、足湯など様々な温泉を楽しむことができます。また、飲泉も可能で、旅館内や温泉街に飲泉場もあります。

三朝温泉は、1916年(大正5年)に、高温泉としてラジウム含有量が、世界第1位になることが発表され、その直後に入浴と吸引によってラドンを体内に取り入れる設備を持った三朝ラジウム療養所が村営で開設されました。現在では、岡山大学病院三朝医療センターの施設として、熱気浴による温泉治療が行われており、平成23年からは、NPOにより観光客への熱気浴体験も提供されています。

■医療と連携する三朝温泉(現代湯治)

三朝温泉が提案するのは、温泉をとことん楽しみ、健康を見つめ直す現代人に適した新しい「湯治」のスタイルです。町内にある岡山大学病院三朝医療センターと三朝

温泉病院の2つの病院と連携して、旅館に滞在しながら、熱気浴療法、温泉プール療法、鉱泥湿布、泥浴療法などの温泉療法を受けたり、自然あふれる町で気ままな時間を過ごしていただくことができます。また、旅館によっては、食事も総カロリーや塩分の表示、曜日ごとに地元の旬の食材を使用したバランスの良いメニューを提供したり、参加旅館すべてに、三朝温泉オリジナルの「ラヂムリエ」(入浴アドバイザー)が常駐し、適切な入浴方法を案内しております。

■三朝温泉だけの温泉療法メニュー

【ラドン熱気浴】

室温32℃~42℃、湿度約90%ほどの温泉熱を利用した熱気浴室に15~30分入り、身体を温めます。そこにはラドンガス(湯気)がミスト状に充満し、深呼吸することによって、細胞が刺激を受け、身体の免疫や自然治癒力を高めます。

【鉱泥湿布】

鉱泥湿布は95℃に温めた三朝温泉の泥をタオルでくるみ、30分患部を温めます。温熱効果により血流が増して、関節周囲や筋肉などにたまった疼痛誘発物質や老廃物を洗い流す効果を発揮します。関節疾患、気管支喘息などの呼吸器疾患にも有効です。

■増富温泉



増富地区は武田信玄が金山開発中に発見したと伝承される隠し湯があり、その効能により湯治場として栄えました。また、霊山である瑞牆山や金峰山を望む地でもあり、明治には「国民新聞」の取材のため飯田蛇笏の案内で高浜虚子が訪れこれを皮切りに井伏鱒二や中山義秀、田中冬二など多くの文人・画家が訪れた地です。

昭和50年には国民保養地に指定され、そのころからラジウムの含有量が多いことが知られてきました。私どもは、ラジウム温泉として東の横綱にふさわしい保養地作りを目指しております。

最終的には、増富の湯が核となり「医の郷」として温泉郷も含む増富全体の地域振興を図りたいと考えております。そのためには医療機関との連携が重要であります。

お客様にとって心地のよい元気の出る場を形成するため、増富の環境を自然の循環サークルにできるだけ近づけることを心がけております。

増富の自然環境は病院では作れない環境もあり、お客様の五感あるいは六感に働きかける体験プログラムを通じて治療効果の上がるモチベーションに仕向けるお手伝いができればと思います。

例えば、平成23年11月に実施した保養プログラムは増富にある資源を有効に活用しつつ、下記のようなこだわりを持って行いました。

- (1)温泉の活用が身体に与える影響
- (2)デトックスの指導
- (3)五感が身体に与える影響
- (4)森林が身体に与える影響
- (5)ウォーキングの活用
- (6)食の指導

(1)温泉の活用が身体に与える影響

体温は、その動物の周囲の温度や活動状況と細胞内ミトコンドリアのTCAサイクルでつくられる熱エネルギーによって変化します。体温が1°C上がると、免疫力は30%以上・基礎代謝は12%上がると言われておりますが、自律神経のバランスを計り入浴指導を行います。

1.自律神経のバランスを整え、生きる力・免疫力を高める入浴指導

25°C・30°C・35°C・37°Cの源泉の中からその日の体調に合わせて一番入りやすい場所を探し、30分から1時間入浴をします。

2.冷え性のための入浴法

最終的には37°Cの源泉に1時間程度入浴できるよう計画を立て入浴します。

(2)デトックスの指導

人間の皮膚には2種類の腺があります。1つは汗腺でもう1つは毛根にある皮脂腺

です。通常の汗は汗腺から出てくる塩分の含まれた汗であり皮脂腺からは通常汗は出てきません。炭素共鳴ドームを利用して加温をし、皮脂腺が開き、そこから汗が噴き出します。この汗の成分を(株)島津テクノロジーは測定し、通常汗腺の約倍の有害重金属その他の物質を検出しました。

(3)五感が身体に与える影響

私たちはストレス過多の生活の中で、次第に自律神経系のバランスが弱まっています。それに伴ってストレス耐性が弱まりストレスを過剰に感じるようになって、悪循環のスパイラルに陥り、体温調節がうまくいけなくなると身体のおちこちで異変を起こします。

◆解消法:五感に訴える運動を実施

- 1.目をつぶり歩く
最終的には100歩を目指します。
- 2.当館裏山の森林整備と瞑想
森林に入り瞑想場を整えヨガマットを敷き瞑想を行います。

(4)森林が身体に与える影響

『人はなぜ森林に包まれるとリラックスするのだろうか』という素朴な疑問から始まり、木々・草花や時には動物との触れ合いを通じて遺伝子的な記憶を呼び起こし、身体が蘇るのではないか、という思いで次にあるコースづくりをいたしました。

◆森林浴コースの事例(案内人あり)

- 1.瑞牆の杜周辺散策コース・不動の滝コース
- 2.日本百名山であり霊山でもある瑞牆山の山岳信仰を取り入れた修行コース
- 3.平成の百名水瑞牆・峰山源流ツアー
- 4.武田信玄の隠し金鉱跡めぐり

(5)ウォーキングが身体に与える影響

現代人は運動が少なすぎます。この運動量の著しい低下がメタボリック症候群を作り出し、病気へつながります。

◆温泉郷内の散策(案内人あり)

- 1.針の山(メタボ解消コース)
- 2.増富民話ラリーコース・七福神めぐり
- 3.命の径(こみち)コース

このコースは「増富の湯」の裏山にあり、イタリアのグロッタの温泉保養地にある散策のコースを取り入れて作りました。さらに、延長した新たなコースには森づくりのエリアを設置し、森の整備をしつつ瞑想やヨガができる場を設置いたしました。

◆登山コース(案内人あり)

- 1.体力的に自信がある方
瑞牆山・金峰山
- 2.少しある方
摩子山・横尾山登山・富士見平小屋の湧水めぐり
- ◆心と体のケアプログラム

1.カンマンボロンでの瞑想コース(案内人あり)

(6)食について

医食同源とは医の源、食の源は同じであり、これらは密接に関わっています。身土不二とは、そこで採れた物をその場で食べることが健康につながります。

安全な食のこだわりは、現在、山梨大学との連携事業を行っております。

- 1.自然循環の仕組みによる安全な農地作り
・食物残渣の堆肥化
・源泉を利用した活性水作りは、クロレラ培養のための主液になり、同時に入浴剤に利用する計画
・土づくり用のクロレラ培養
- 2.無農薬の野菜作り(体験コースあり)

これらの自然の循環サークルを作り上げていくことで荒廃した農地を改善し良い作物を提供する仕組みと構築したいと思っております。

また、農場ではネギ・ジャガイモ・サツマイモ・刃物類を始め、とまと・なす・きゅうり・にんじん等季節の野菜と山野草・きのこ園でのきのこ作りをしております。特に大豆作りは、豆乳・味噌・豆腐・枝豆目収穫等多様な体験が可能です。

なお、酵素・米麴・味噌・漬物等、増富地域

■玉川温泉



玉川温泉の特徴は、

- 1日本一の強酸性の温泉
- 2日本一の湧出量を誇る源泉「大噴(おおぶき)」
- 3温泉から生成される特別天然記念物「北投石」から放出される微量の放射線
- 4天然の岩盤浴地

と、温泉入浴だけでなく自然が造りだした岩盤浴との組み合わせで療養効果が期待できる湯治場であります。がんを患った湯治客が多く見受けられ、最近では再発防止目的の湯治客が増えてきております。玉川温泉の創業者は、玉川温泉で長年悩んでいた持病が治ったことに驚き、難病で悩んでいる人に広く利用してもらいたいとの願いから、玉川温泉の特異な温泉を研究するため昭和18年に玉川温泉研究会を設立し、温泉の効能について理学的、医学的研究を行い大きな研究成果を得ております。玉川温泉に関する書籍も多く、難病を克服した体験記から医師の研究成果を記したもので多数発刊されており、まさに湯治療養の温泉地であります。玉川温泉、新玉川温泉には看護婦が常駐しており、病状に合わせた湯治ができるよう入浴相談を行い、夏場は月に4日程度、医師が湯治客の相談や診察を無料で行っております。

玉川温泉エリアには、岩盤浴地に最も近い「玉川温泉」と、徒歩で10分程度のところに「新玉川温泉」、その他2軒の旅館があります。

で伝統的に引き継がれた発酵文化の継承も行っております。田んぼでは黒米・もち米を生産しこれらは食材に使われます。

その他の魅力をご紹介します。

1.健康教室(地元医師の講座)
毎月1回開催される中国医学からみた健康教室はすでに120回を迎えようとしています。

2.自調整体操(指導員あり)
骨格のバランスを自分の力で戻します。

3.ライウムオンドル浴
増富の湯の源泉水の水分を抜くとファンゴ(泥)状態になり、1~1.5μシーベルトの放射線を出すファンゴになります。

パッケージにした源泉ファンゴをオンドル浴の床に置き一緒に加温します。38°Cほどの温度で床全体とファンゴを温め、ファンゴは患部に乗せ静かに寝ていただきます。

これは細胞の活性反応の高まりを期待します。

4.入浴後に整体も利用できます

源泉入浴でリラックスした身体をゆっくり深部までほぐします。

このように、医学的知見のある方々の指導を受けここまでやって参りました。増富に関心を持たれた方はぜひご一報いただければ幸いです。

お問合せ先

増富の湯 0551-20-6500

玉川温泉は80年の老舗旅館であり、炊事場が備わった「自炊部」もあります。青森ヒバで造られた大浴場は、源泉100%の湯、50%の湯、あつい湯、ぬるい湯、蒸気浴、箱蒸し湯、気泡湯、寝湯などがあり、刺激が強い方のために弱酸性の湯もあります。また、介助が必要な方には貸切浴場もあります。源泉を利用し天然に近い状態を再現した屋内岩盤浴を昨年増設し、天候に左右されず快適にご利用できることで大変好評であります。新玉川温泉は、平成10年に開業したバリアフリーの旅館であり、大浴場では源泉100%の湯から弱酸性の湯など12種類あり、リハビリとしての歩行浴やリラックス効果がある頭浸浴、屋内岩盤浴や露天風呂など、幾多の組み合わせの入浴が可能です。貸切浴場は源泉100%と50%の2種類あります。玉川温泉は、一部の客室を除きほとんどのお部屋にトイレ、テレビはついておりません(自由に使えるテレビ付の談話室がございます)ので湯治に専念したい方にお勧めいたします。新玉川温泉は全室トイレ、テレビ、冷蔵庫が備わっておりますので、お試し湯治や観光目的の方にお勧めいたします。

お問合せ

◆玉川温泉 (電話:0187-58-3000)
旅館154室、自炊99室

◆新玉川温泉(電話:0187-58-3100)
旅館210室

五頭温泉郷



うららの森全景



薬師の足湯



村杉共同露天風呂と桜

■秀でたラジウム温泉を中心として

(1)五頭温泉郷の位置

新潟県阿賀野市五頭温泉郷は新潟市より福島・会津若松方面へ約 30 km、名峰「五頭連峰県立自然公園」の一角に位置します。

(2)五頭温泉郷の歴史と温泉文化

五頭温泉郷村杉温泉は、今から 677年前、建武 2年（1335 年）足利家の武将であった荒木正高が戦乱を逃れてこの地に着き、薬師如来のお告げにより温泉を発見したと言い伝えられております。

現在の源泉1号井および2号井の後ろにある石段を登ると正高が建てたといわれる薬師堂が今も残り、当時の面影を感じさせてくれます。

それ以前の村杉集落は、全く別の場所に位置し、その場所からは「村杉遺跡」と称し旧石器や縄文土器が出土されており、数千年前から人が住んでいたと言われております。前述の 677 年前に温泉が湧き出したと言うことから、現在の温泉街の方へ移住し、以降国有地払い下げを受け各自の土地を確保し、村杉温泉の原型が形作られ現在に至っております。

また温泉については、明治 8 年(1875 年)病気療養のために村杉を訪れた葛塚(旧豊栄市)の遠藤七郎昭忠の提案により共同浴場を開設したと示されております。

大正 3 年に新潟大学薬学士 中山 蘭教授らによる温泉分析の結果、ラジウムの含有量が世界レコードと示されており、当時の新聞等で大々的に報道されております。

また、当温泉は、古くから多くの文人墨客らに愛され、近衛文麿、橋本閑雪、河東碧梧桐、相馬御風、野口雨情等々、名士達の書、手紙などかけがえのない宝物が残されており、県内はもちろん全国各地から多くの方々が訪れ、一世を風靡いたしました。現在も温泉の原型と言われている「薬師 堂」、「源泉」、「共同浴場(外湯) 薬師乃湯」の周りに「村杉共同露天風呂」「薬師の足湯」「飲泉所」を付帯させたミニスパエリアには人気スポットとして年間十数万人のお客様が訪れています。

(3)村杉温泉 奇跡の源泉3号井発見

◎村杉温泉薬師の湯1号井
ラドン含有量 198.9×10 1o キュリー/kg
54.7 マ ッ へ / kg
735.9 Bq 湧 出 量91.8 リットル/分（自然湧出）

◎村杉温泉薬師の湯2号井
ラドン含有量 93.1×10 1o キュリー/kg25.6 マ ッ へ/kg
344.4Bq 湧 出 量 64.0 リットル/分（自然湧出）いずれも高い成分表示を示しております。近年発見された薬師

の湯3号井の温泉成分の分析を実施したところ、まれにみる奇跡的な数値と湧出量(自噴)が確認されました。

◎村杉温泉薬師の湯3号井
ラドン含有量 744.2×10 1oキュリー/ kg
204.7 マ ッ へ/kg
2753.5Bq 湧 出 量483.0 リットル/分（自噴)(平成 13 年調べ)また、湧出量においても、貴重な自然湧出の1号井 91.8 リットル/分、2号井64.0リットル/分があり、過去数名の学者の先生から「自然湧出でこれだけ濁りが無く、成分も高い温泉も珍しい。国宝級の源泉」と絶賛をいただいた経緯があります。3号井においては更に自噴で483.0リットル/分を記録しておりますので、素晴らしい数値であることを認識いたしております。

(4)村杉温泉 (単純放射能泉(ラジウム泉)) の効能

当温泉は古くから「子宝の湯」「痛風の湯」「万病の湯」として訪れる方々に親しまれてまいりました。心や身体が癒され、とてもリフレッシュできる数が少なく貴重で効能が高い素晴らしい温泉です。

この温泉の特徴は、入浴することで大きな効果が得られますが、飲泉そして何よりも気化したラドンを鼻や口から吸い込んでの効果が一番大きいと言われていいます。学者の先生の測定によりますと温泉街の空気中にもこのラドンが多量に含まれており、深呼吸するだけでも健康増進につながると話されました。

ラジウム温泉は、本来温泉や土壌、岩盤から発生するラドンや微量の放射線(人間の身体に適量)が、肉体が本来持っている自然治癒力を刺激・活性化させます(血流を良くし、細胞を活性化させ健康な状態をつくりだし、維持するということです)。

この微量のラドンや放射能が人間の自然治癒力を刺激・活性化する効果を「放射線のホルミシス効果」といいます。つまり、ラジウムから発生するラドンや微量の放射能がまるで薬のように私達の身体の潜在的生命力を刺激し健康を維持するための元気をつくりだしてくれると文献に示されております。

◎一般的適応症
神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、運動麻痺、関節のこわばり、うちみ、くじき、慢性消化器病、痔疾、冷え性、病後回復期、疲労回復、健康増進に効能があります。

◎泉質別適応症
痛風、動脈硬化症、高血圧症、慢性胆囊炎、胆石症、慢性皮膚病、慢性婦人病

◎一般的禁忌症
急性疾患(特に熱のある場合)、活動性の結核、悪性腫瘍、重い心臓病、呼吸不全、腎不

全、出血性疾患、高度の貧血、その他一般に病勢進行中の疾患、妊娠中(特に初期と末期)

◎泉質別禁忌症 なし

(5)五頭温泉郷が現在取り組んでいること

■温泉地周辺の観光資源を活かした健康増進型保養温泉地創り

当地は雄大な自然環境に恵まれ、裏には五頭連峰県立自然公園が控えており、「全国森林浴の森 100選」にも選ばれております。五頭連峰の各種登山ルートを始め、句碑・歌碑が 250 基余り立ち並ぶ文化の道「やまびこ通り」(林道 100 選農林水産大臣賞受賞)や、「五頭薬用植物園」「五頭山麓いこいの森」など自然環境を活かし、健康的に滞在環境をお楽しみ頂けます。

更に、当地は「ゆうきの里」として、全国的に有名な有機栽培地域でもあり、「食」に関しても平成 12 年 5 月からパルシステム生活協同組合連合会(旧 生活協同組合連合会 首都圏コープ事業連合)と「食料と農業に関する基本協定」を締結しております。また、食と緑の交流センター「うららの森」では「情報発信館」・「体験学習館」・「ゆうきふれあい即売所」等の施設や「ブルーベリーの植栽」・「エゴマの栽培」・春は「菜の花」、秋 は「コスモス」また「螢の里」創りと観光協会 や 旅 館 組 合、NPO法 人、地域の住人達が参加して維持管理を行っています。今後も一般の皆様方に幅広く参加を呼びかけ、花畑の拡張や漢方等の栽培を進め、体験メニューの充実も含め【健康の里拠点整備事業】を推進し温泉街との一体感を深め、「温泉入浴+自然探索」+「ウォーキング・トレッキング」+「体験」+「健康食」+「森林セラピー」+「ラドンセラピー」等に 産・学・医 連 携 に よる「検 診」+「医 療」を加え、様々なプログラムの策定を行い実践して参ります。

「新鮮で安心な料理でおもてなしするためにも、無農薬・無化学肥料の米や健康野菜の産地として農業を守り、環境に配慮した温泉地になる」を地域のテーマとして掲げ、村杉温泉内で使用するシャンプーを生分解性の高い物に替えたり、割りばしを洗って繰り返し使える天然木の塗り箸の使用に切り替えたり等、環境への配慮を十分に行っております。

昨年度より五頭山麓緑資源ワークショップ 戦略事業により遊歩道の整備事業を始め、薬草や草花の植栽等を行い滞在環境整備に邁進しています。

平成18年以降、知事の進言もあり、新潟県が推奨する「健康ビジネス連峰政策」に参画し、ラジウム温泉と地域資源を最大限有効活用したヘルスツーリズム、アンチエイジングツアー等を実施する事により、大学や健康関連機関との連携により「エビデンス」の取得等を図りながら「ブランド化」を目指し推進して参りました。以下のような事業を展開

致しております。

◆『ラジウム温泉でリフレッシュ&リラックス』

新潟県や健康関連機関、各大学機関との連携により開発した、温泉利用型健康増進プログラムです。

温泉入浴指導員によるご家庭で4実践出来る正しい入浴法の伝授や、名湯村杉温泉入浴、食薬同源の健康料理、ストレッチ運動や健康ヨガ体験など、大学教授他、専門家による健康講座等、“癒しと健康増進”の健康管理指導プログラムの実践です。

◆『シニア遊学の旅 in 新潟』

アンチエイジングの第一人者である順天堂大学の白澤卓二教授監修の2泊3日のアンチエイジングツアーです。

白澤教授の講演を始め、プロスキーヤー・登山家の三浦豪太氏による川魚掴み取り体験・沢登り体験、トータルフィットネスコーディネーターの中尾和子先生によるポールエクササイズ、温泉入浴指導員による正しい温泉入浴講座等、充実の講演内容です。また、ソバ打ち体験、エゴマ絞り体験、薬草入り餃子作り体験等、体験講座も御座います。

お料理は白澤先生監修によるフードマイレージを重視し、カロリーや繊維質管理をしたアンチエイジングメニューを美味しくお召し上がりいただけます。

◆一般社団法人健康ビジネス協議会との連携強化により、新潟薬科大学産官学連携推進センターの平山匡男先生にによる「ラジウム温泉浴が健康成人の血管内皮機能、生理学的検査値(FMD検査)」の実施を行い、新潟医学学会誌に4月号に掲載されました。

◆『たんぱく調整・食と学びのツアー』

(株)バイオテックジャパン様との連携により開催した「たんぱく調整・食と学びのツアー」は一般社団法人健康ビジネス協議会の企業連携において商品化させて頂いたツアーです。医療食を研究開発している(株)バイオテックジャパン様の工場見学及び新商品の紹介・試食と当館自慢のラジウム温泉と自然の大庭園を満喫していただき、たんぱく調整を主とした地産地消の健康食材をメインに医療向け新会席料理を堪能頂き、身体の中と外からリフレッシュ&リラックスして頂く趣旨のツアーを実施。以上のような展開を今後も、より内容の充実を図り継続的に実施していく予定です。

(6)五頭温泉郷今後の構想と展開

一番大切なことは、源泉の維持管理だと思っております。また、ラジウム・ラドンについての知識を身につけ、マーケットへ正確かつダイレクトな情報発信をしていくことが重要であると考えております。

18

19



ラジウム・ラドン温泉 広域連携による 地域活性化

■村杉ラヂウム温泉風景利用策

大正 10 年には九州・湯布院に先駆け、日本初の林学博士である本多静六先生が訪れ、ラジウム温泉と雄大な自然環境を活用した壮大なる計画「村杉ラヂウム温泉風景利用策の復活」が提案され、今も新潟県立図書館に保存されています。

本多静六博士は、当地は森林を有し土地の良好なる上にラヂウムを多量に含む温泉を有しているのですから、将来極めて有望にして大いに発展すべき資質を有するものと考えますと示されています。「風景利用策」の内容は、実に詳細で具体的に示されています。土地利用の平面図まで添えられ、ラジウム温

泉の効能の素晴らしさは勿論のこと、森林浴の効能や登山道、遊歩道の整備や有効活用、展望台の設置、名物や土産物の提案まで描かれています。

今後の展開としては、100年近く実現出来なかった【夢の構想】を本多静六博士、現代版【村杉ラヂウム温泉風景利用策】と位置づけ、開湯677年の歴史と全国トップレベルのラジウム含有量を誇る温泉と五頭連峰県立自然公園の雄大な自然環境の有効活用を図り、現在取り組んでいるヘルスツーリズム、アンチエイジングツアー等もさらなる内容の充実にも努め、「環境」と「健康」をテーマとした温泉地創りを推進して参ります。

提携温泉地紹介

関金温泉



◆美章苑
倉吉市関金町関金宿1464
TEL:0858-45-3511

◆鳥飼旅館
倉吉市関金町関金宿1232
TEL:0858-45-2121

◆グリーンズコーレせきがね
倉吉市関金町関金宿1397-3
TEL:0858-45-2211
<http://www.green-squale.net>

◆湯楽里
倉吉市関金町関金宿1396-2
TEL:0858-45-6400
<http://www.sekigane-yurari.com>

◆関の湯(共同浴場)
倉吉市関金町関金宿1227-1
TEL:0858-45-3186

◆湯命館
倉吉市関金町関金宿1139
TEL:0858-45-2000
<http://www.yumeikan.com>

(1)関金温泉の概要・歴史

鳥取県の中央に位置する倉吉市関金町は東の大山、南の蒜山に囲まれた山間にある山陰の歴史ある温泉地です。江戸時代には、倉吉から犬伏(いぬばさり)峠を越えて勝山に抜ける美作(みまさか)街道の宿場町として栄えました。温泉が湧き出していたことから、「湯の関宿」と呼ばれていました。

その当時から湯の美しさは評判で、「銀湯」「白金の湯」と呼ばれています。湯は、三朝温泉と同様にラジウムを含有します。

開湯は弘法大師が巡錫で地蔵院を訪れた際、ある朝湯谷川で顔を洗っていると、ほのかに温かい水が流れているのを感じ辺りを見渡すと白い煙を見つけ、村人を集めて煙の元を掘らせると無味無臭の温泉が滾々と湧き出たと伝えられています。

関金温泉の開湯伝説には諸説あり、もう一説は天平 3 年(731)、行基菩薩が地蔵院を開いた際、湯谷川で傷ついた、つがいの鶴が湯浴びをし傷を癒していたのを発見したのが始まりともいわれています。寛保 2 年(1742)に鳥取藩士松岡布政によって 編纂された伯耆民談記には銀湯として紹介されており、透き通った源泉の美しさから「白銀の湯」と呼ばれるようになりました。

(2)泉質と適応症

関金温泉の泉質は単純放射能泉(低張性弱アルカリ性温泉:源泉温度は 40 ~ 60°C)でラジウム含有量全国第 2 位を誇り、低レベルの放射線はホルミシス効果により細胞を老化させる活性酸素の動きを抑えるときとされます。

関金温泉の効能は神経痛、リウマチ、筋肉痛、痛風、動脈硬化、慢性皮膚病、また、心身の休養、疾病に対する療養など温泉の持つ効能を地域住民が享受し、心と身体の湯治に使われてきた歴史・文化があります。

昭和 45 年には、温泉利用の効果が充分期待され、かつ健全な温泉地として、国民保養温泉地に指定されています。また、平成 23 年 10 月には、日本の名湯百選にも認定され、泉質(ラジウム泉)が希少であり、保養

・休養・療養の効果が高いと評価されました。

(3)所在地とアクセス

自動車利用の場合:米子自動車道湯原ICから約 30分

JR利用の場合 :倉吉駅から関金温泉行きバス約30分

(4)観光ポイント

◆清流遊 YOU 村

大山山麓を流れる小鴨川。その源流は特産ワサビの花も美しく、まさに清流の里。一年を通じて訪れる釣り仲間の姿が絶えない絶好のロケーション。「清流遊 YOU 村」でしか味わえない四季折々の自然を存分に満喫できます。

◆水車の郷 体験工房

地区の活性化と特色のある村づくりを目指して、平成 8 年から全戸が参加の「夢づくりおもしろ倶楽部」を組織し、活動しています。その一環として、この地域で栽培される非常に品質の良いそば粉を、復元した水車小屋の水車で碾き、手打ちソバの体験ができるような体験工房の施設です。

◆大山池

天神野地区 450ha の水田のかんがい用として造られた 8 か所のため池のうち最大のもので、地名から「狼谷野水溜池」というのが、その正式な呼び名ですが、大山の姿がさかさに映ることから、「大山池」の呼び名がついたものです。

(5)宿泊施設

美章苑
鳥飼旅館
湯楽里
グリーンズコーレせきがね

(6)入浴施設

関の湯
湯命館

ラジウム・ラドン温泉を利用した健康日本推進連絡会議規約
平成21年4月1日制定 平成25年6月18日改訂

(名称) 本会議は「ラジウム・ラドン温泉を利用した健康日本推進連絡会議」(以下「連絡会議」と称す)

(目的) 全国屈指のラジウム・ラドン温泉で有名な三朝温泉、増富温泉、玉川温泉、村杉温泉、関金温泉等が連携し、ラジウム・ラドン温泉の医療への活用の正しい認識、地域の連携、地域活性化の取り組みをそれぞれ協議し、相互に補完できる有機的な広域のネットワークを検討し、全国の保養、療養客に発信することを目的とする。

(事業) 連絡会議は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を実施する。
ラジウム・ラドン温泉の医療及び福祉・介護や健康増進などの社会的活用、人材育成の調査・研究 ラジウム・ラドン温泉を利用した医療と地域の連携に関する各種研究会、公開セミナーなどの開催 ラジウム・ラドン温泉に関する科学的な研究とその実践における各地域間のネットワークづくり その他、ラジウム温泉連絡会議の目的に必要な事業

(構成団体) 連絡会議は第二条の目的に賛同する団体をもって構成する。

(役員) 連絡会議に委員長1名、副委員長若干名、委員若干名、監事2名を置く。委員長はNPO法人健康と温泉フォーラム会長が務める。副委員長、委員、監事は、ラジウム温泉連絡会議の承認を得て、委員長が委嘱する。役員はラジウム温泉連絡会議が解散するときまでとする。

(役員) 役員の職務は下記の通りとする。委員長は、連絡会議を代表し、事業を総括するとともに会議を主宰する

。副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。委員は、各自の専門的な立場から事業推進をアドバイスする。監事は、連絡会議の会計を監査する。

(会計)
第七条 連絡会議の経費は、補助金、負担金、協賛金、その他の収入をもって充てる。

(事務局)
第八条 連絡会議の事務局は、NPO法人健康と温泉フォーラム内(東京都渋谷区西原1丁目50番2号)に置く。

(解散) 連絡会議は、第二条の目的を達成したとき、解散する。

(委任) この規約に定めるほか、連絡会議に関して必要な事項は、委員長が別に定めることができる。

付則
(1)規約実施、平成21年4月1日
(2)規約改正 平成25年6月18日

編集・発行 特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
〒151-0066 東京都渋谷区西原1-50-2
☎ FAX 03-6804-8575
E-mail info@onsen-forum.jp <http://www.onsen-forum.jp>
制作 涼音堂茶舗
E-mail info@ryoondo-tea.jp <http://www.ryoondo-tea.jp>
発行日 2013年9月27日
©The Forum on Thermalism in Japan 2013
printed in Japan